

古書修補のご紹介と基本方針

松本研究室 松本 弘

松本研究室として30年来、和漢の古文書（室町）、近世文書（江戸・明治）を中心とした文書全般の修補を手がけて参りました。文書形態は、代表的な四つ目綴じから折り本、卷子本、粘葉装、大和綴じ等の和装本に始まり、古筆切、番付、地図等の一枚物まで、和紙資料を中心に扱っております。

修補の際にまず留意しなければいけないのは、更なる修補に備えて手を加えるということです。材料は主に水、澱粉糊、ミョウバン、柿渋など副作用の心配のない自然素材を用い糊は再び剥がせることを前提に使用しています。

芸術品の修復と異なるのは、どこが欠損していたかわかるように直すことで欠損文字は加筆などせず、裏打ち紙などを染めたりもしません。小口を揃え見た目を美しくするための、原本裁断も避けなければなりません。このような修補を施された古書を結構目にしますが、これでは修補を重ねる度に原本が小さくなってしまい、文字内容が失われる危険があるからです。資料として丈夫で読みやすく仕立てることと、可能な限り原型をとどめようとする事、その判断と調整が難しいところです。

現在全世界的に書物は様々な危機にさらされており、洋紙における中性紙問題の他にも電算化を押し進める中、ともすれば原本の持つ重要性が軽視されがちではないでしょうか。

一時図書館ではマイクロをとりさえすれば安心という風潮があり撮影のために本の綴じをほどくことが多かったようですが、本の構造をよく知らないで綴じ直せなかったり、かえって本を壊してしまい結局ばらしたまま、閲覧できない状態で保管されるといった事態も起こりました。ひどい例ではマイクロにとった後、原本を廃棄したこともあったようです。

研究者もいろいろで、内容さえわかれば複製で良いという内容重視の方もいらっしゃいますが、複製と原本では実際に手にとった時の情報量が違います。製本様式や、本紙の紙質、修補跡の有無や、繕い紙にある書き込み等原本からしか伝わらない情報が沢山あるはずですよ。

活字本に翻刻されていても、原本が木版であったり古活字版であったりすると感じられる趣もちがってきます。虫よけに銀杏葉をはさんで使用していたこと、赤く染めた和紙を嘗めて本紙に張り付けると付箋紙として使えることなど、内容とは直接関係の無さそうなこともおもしろい発見となります。

今ではマイクロは100年もたないというのが定説ですが、和紙なら何百年と持ちこたえ、今なお支障のないことが実証されている訳です。

和紙はたいへん柔軟な強靱さを持つ素材で、虫損でレース状になったものや、鼠の糞尿で固まったもの、水害で膨張したり黴で柔らかく老けたもの等でも適切な修補を施せば、さらにこの先何百年と保存して行くことが可能なのです。

明治以降、日本の文化に対しての考え方が変わり、古くて汚いものが疎まれ何でも新しいものを良しとする風潮が広まりましたが本に対しても少なからず、そういった考えによる対処が行われたように思います。とりかえしのつかない「修補」を施された例も多く、例えば化学糊やセロテープの跡は二度と元には戻りませんし、和本を立てて整理するためだけに、厚紙の表紙を取り付け、開きが悪く読めない本になっているものもありました。

本の形態、内容がわかって初めて、本当の意味での図書館における管理・保存が出来るのかもしれない。

修補の仕事は毎日の地味な作業の積み重ねですが、単なる技術の問題にとどまらず本来司書・学芸員の資格を有する者が、書誌学の知識に基づいて為されるべきものと考えています。時代性、内容価値に即した修補を検討模索することが大切です。現在修補室を置いている図書館は稀ですが、そのような可能性が模索されていた時代もあったようです。

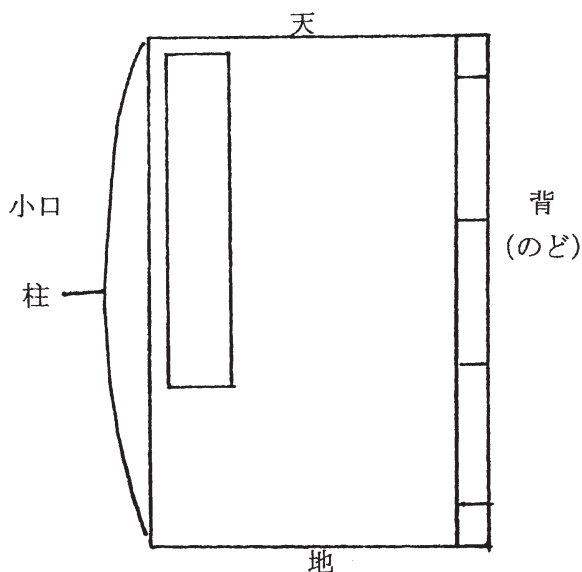
修補の仕事は専用の場所があって、道具が揃っていて、じっくり腰を据えて行えるのが理想です。職人の技術は元来、秘技・秘伝的な捉え方が根強く、公開されづらい側面がありましたが一人の職人が一生の内に手掛ける事が出来るのは、極一部の本だけです。今回の実演を通して、多くの方に興味を持っていただければと願っております。

実演

和装本の修補（虫損穴埋め）

- 1 修補の最初に大切なのは、本の現状の正確なデータを残しておくことです。
現在はデジタルカメラという便利なものがありますから利用するのもいいかもしれません。
丁の間に覚え書きや付箋などはさまっていれば、ひとつずつ別に保管します。この時どこのページにあったかを明記しておきます。
修補中に不明になりそうな事は皆控えておきます。
- 2 綴じ糸を切って解体していきます。
こよりで中綴じしてあるものは、はずします。
丁数を数えて、目立たない場所に鉛筆でナンバーをふります。
組本でしたら1-1、1-2、のように通し番号を入れます。
虫損部分や端が折れている箇所はぬるいアイロンをかけておきます。
- 3 綴じ穴周辺は虫損も多いため、その糞などで汚れているので掃除しながら進めていきます。
- 4 下準備が整ったら糊の濃さを調整します。
アイロンの熱で初めて付く程度の薄目に仕上げます。
- 5 本紙をアイロン台（家庭用銀布張りのもの）に裏面を上にな一枚拵げ虫損部分の上に繕い紙をのせ、水を含ませた細目の筆で欠損の形に沿って、3ミリほど大きめになぞっていきます。
- 6 濡らした部分が透けて見えるので、その線に直角になるようにひっぱりながら、形をつくって切りはなします。
和紙の繊維を放射線状に伸ばすような気持ちでちぎります。
- 7 出来た紙片の裏に薄く糊を塗り、ピンセットで虫損の上に置いたら軽く馴染ませ、アイロンで糊を乾かします。
水分が飛ぶ前にアイロンを動かすと、皺になるので気をつけます。
ここは感じがつかめるまで、予備の紙で試した方が良いでしょう。
- 8 柱やのど部分の欠損が激しい場合は、天から地まで一枚の短冊状の繕い紙で補強します。
和紙にスチール定規をあて、水筆で一直線になぞり同じように繊維を出すように、ひっぱり切って切りはなします。
- 9 修補済みの本紙からはみだした繕い紙は、本紙ぎりぎりをカッターで切り、元通り折り目をつけ、角を揃えたら、数時間プレスします。
堅い木板2枚の間にはさみ、大きめの辞典などを重石にします。

- 10 製本は出来るだけ元の針穴を利用します。
 本紙と表紙はこよりの中綴じで固定しますので、糸綴じはあまり締め付ける必要はありません。最後にもう一度プレスして出来上がりとなります。



※参考

和装本	適当なものがなければ、古書店で廉価な端本など求める。 これは修補用の繕い紙にも使用できる。
生麩糊など澱粉糊	粉から炊くもの以外では、無香料で化学保存料添加の少ない物
和紙	繊維の長い本楮、未晒しの薄目
糸	本の大きさに準じた太さの絹糸
道具類	目打ち（千枚通） ピンセット（先の細いもの） カッター 30センチ定規 針 鋏 糊刷毛 等

上記商品の大体のものは東急ハンズの製本コーナー他で入手可能
 専門店は以下の通りです。

小津和紙博物館	日本橋本町 2 - 6 - 3	3663-8788
町田糸店	台東区駒形 1 - 1 - 1	3844-2171
製本工房リーブル	文京区本郷 1 - 4 - 7 協和ビル 3 F	3814-6069

（こちらでは教室などもあり、購入に際してもアドバイスが受けられるようです。）



松本研究室

156-0057
東京都世田谷区上北沢 5-22-2
Tel 03(3306)0214



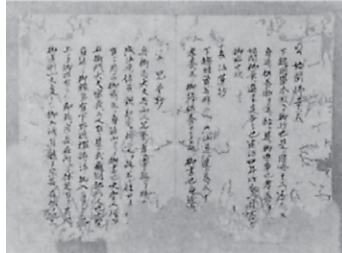
松本 弘昭

早稲田大学第一文学部東洋史学専修 昭和36年3月
同大学院文学研究科史学専修修士課程卒業 昭和38年3月
宮内庁書院部の修補官 渡藤謙之輔氏に
氏の改年まで頼み、古書修補技術の
指導を受ける 昭和38年から昭和53年まで

尚、当研究室は元芝学園中等学校理事長・校長、
元大正大学理事長である父、松本忠明により
昭和11年に創設されたが、引退により
昭和47年松本弘が引き継ぎ、
製本、古書修補部門を新設し今日に至る



修補前



修補後

Matsumoto Book Restoration Institute

We are engaged in mending of books in general (books bound in Japanese style, folded books, rolled books), specializing in Japanese and Chinese, modern (Edo, Meiji) and ancient (Matsunaka) books.
We rebind books by changing covers, mend ragged books by filling wormholes and lining millwaxed paper one by one, and restore books as far as possible whose pages stick to each other damaged by water or bookworms.
We believe that the highest priority should be given to protection of the value of books as materials for study, and that it is meaningless to mend books only for better appearances.

- 和漢の近世文書（江戸・明治）、古文書（室町）を中心に
文書全般（和綴し、折本、巻子など）の修補を手掛けております。
表紙のつけかえなど仕立て直しから、虫損、霉で腐くなったものは一枚ずつ六埋め裏打ちし、水害、虫害で開かなくなった本も、最大限元の姿に再生いたします。
資料としての価値を守ることを第一とし、見た目の形のみを美しく整える修復は無意味と考えます。
- 修補の基本方針
- 一、製本形態は原本通りに行います。
司書、学芸員の資格を有する者が、原本の時代性、製本様式、紙質等を見分け検討し、内容価値に即した修補を行います。
 - 一、裏打ち紙には本ころぞの未晒し（美濃紙）を用います。
故意に裏打ち紙を原本に合わせて染めることはしません。
抜け落ちた部分、虫喰いで失くなった部分がかかるように
裏打ち紙は原本と区別できる未晒しの白を使用します。
 - 一、原本の三方新装は行いません。
文字の損失や、原本が小さくなるのを防ぎます。
文字の損失や、原本が小さくなるのを防ぎます。
 - 一、自然材料（水、澱粉糊、ミモケパン等）を用います。
副作用がなく、再度の修補に耐えるよう備えます。

Mending Principles

1. Application of the same binding style as that of original texts. Staff members who are qualified as librarian or curator examine and judge age, binding style and paper quality of the books, and mend them in accordance with their features and quality.
2. Usage of unbleached paper mulberries (Mino Paper) for guards. Guards are not dyed the same color as the original texts. Usage of unbleached white guards indistinguishable from the original texts to clarify there are missing pages and wormed and lost pages.
2. No edges of original texts are cut so that losses of letters and downgrading of the original texts can be avoided.
4. Application of natural materials (water, starch, alum and so forth) which are free from harmful affectress and enable books to be mended repetitively.